

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 黒部市立生地小学校・教諭・森山さおり
- 2 研修期間 令和4年9月29日(木)～令和4年10月1日(土) 3日間
- 3 調査研究課題 小学校におけるよりよいキャリア教育の在り方を探る
- 4 研修機関等 青森県：おしごと体験広場キッズハローワーク、津軽藩ねふた村
大阪府：関西経済同友会、同会教育問題委員会、関西キャリア支援協議会
大阪府教育庁、大阪市教育委員会、大阪科学技術館、あべのハルカス

5 研修の概要

(1) 青森県

① おしごと体験広場キッズハローワーク

子供から大人まで誰でも参加できる職業体験をツールとした地域コミュニケーション事業である。職業体験を通して子供たちが地域を支える仕事を知るだけでなく、地域の職業人が自分の仕事の魅力を再発見することができるという双方向性がこれまでにない取組だと思った。子供たちが「就労」「対価」「消費」のサイクルを体験して「うれしい」「楽しい」「やったあ」と「実感」したり、「りんごがおいしい」「りんご箱を作るかなづちの音にも違いがある」というように、「感じ」たりすることを大切にしているという話から、学校教育においても子供たち自身が「感じる」体験を大切にしていかなければならないと再認識することができた。

② 津軽藩ねふた村

青森県内に数々ある「ねふた祭り」の由来や名称、「ねふた」の形の違い等について知ることができた。以前から弘前市の「ねふた祭り」と青森市の「ねふた祭り」と違いがあることに疑問をもっていた。どちらも起源は同じで、眠気を追い払うための祭りで、「眠い」ことを「ねむてえ」または「ねふてえ」と言い、これがなまって「ねふた」、そして、海岸地域ではより荒々しくなまって「ねふた」となったとのことだった。弘前市や青森市以外にも数々の「ねふた祭り」があること、各地域の道路状況等により、「扇ねふた」や「組ねふた」と形も分化していったということが分かり、青森県の祭り文化の一端に触れることができた。

(2) 大阪府

① 関西経済同友会

経済人が個人で参加する民間非営利団体で、現下の様々な問題につき、提言し、行動する組織である。業種は分散しており、企業規模も大小様々で、提言・行動のために講演・視察(国内・海外)・実地体験等を行い、会員相互の切磋琢磨に努めておられるとのことだった。今年度は、「大阪まちづくり委員会」「防災・減災・復興委員会」「教育問題委員会」「こどもの未来委員会」等、35の委員会に分かれ、「調査・研究」活動を行ったり、解決すべき課題について「提言」したり、提言の「実行・実現」に向けて活動したりしておられた。委員会のジャンルは多岐にわたっており、その幅広さに驚いた。会員のみなさんは、それぞれが自分の会社を経営されながら、さらに新しい課題にも目を向け意欲的に活動しておられた。私自身も学び続ける姿勢を常にもち、視野を広くいろいろなことにアンテナを張っていくようにしていかなければならないと強く感じた。

② 関西経済同友会教育問題委員会

令和4年2月に教育問題委員会が「『学校任せ』から『社会全体で共創する』初等教育への転換」を提言した。初等教育課程において、子供たちに「メタ認知」を伴う「自己肯定感・自己効力感」を土台として、「3つの力」(課題発見力、課題分析力、課題解決力)が開発されることが大切であるとした。その高まりが「3つの力」を開発する原動力となり、「多様な経験を通じた能力開発」の場で「3つの力」を活用・実践することで「自己肯定感・自己効力感」がなお一層強化されるというスパイラル的な能力向上のサイクル「正の循環」が重要であると提唱されていた。社内教育の中でも、「自己肯定感・自己効力感」を高めることを意識しているという話を聞き、子供たちに対しても「できないところをどう伸ばすか」という減点法の視点ではなく、「何が得意なのか、どうやって伸ばしていくか」という加点法の視点に立って向き合っていかなければならないと再認識することができた。さらに、提言の中の「教

員のみなさん。みなさんが大変な環境の中、子供たちの成長のために尽力されていることを私たちは知っています。みなさんが子供たちに向かい合い、伴走できるよう、私たち企業人も初等教育を共創する一員として協働していきます」というメッセージに力をいただいた。学校で全てを抱え込むのではなく、学校・保護者・地域・企業とが協力していくことの大切さを実感することができた。

③ 関西キャリア支援協議会

産業界と教育現場の連携による学校教育支援をさらにパワーアップしていくために、関西生産性本部が中心となって、(公社)関西経済連合会、(一社)関西経済同友会、大阪商工会議所、(一財)大阪科学技術センター、連合大阪にも呼びかけ、「関西キャリア教育支援協議会」が設立された。それぞれの組織の独自性を生かしつつ、各組織が行っていた教育現場への社会人講師の派遣、職場見学・体験の受入れ、教員研修会への企業人講師の派遣等のキャリア教育支援活動が「情熱教室」に一本化され、教育現場のニーズと産業界や労働界のシーズがマッチした支援となっている点がとても魅力的であると思った。特に、大阪市立野田中学校で行われた取組がすばらしく、企業からのミッションを基に、子供たちが問題点等を徹底分析した上で企画書を作成し、中間発表会を経て最終発表、評価、審査を行うという流れの中で子供たちが主体的に活動している様子が伺えた。より身近な企業との交流が、子供たちの知的好奇心を刺激し、それがキャリア教育につながるのだと分かった。

④ 大阪府教育庁・大阪市教育委員会

大阪府教育庁は、全国学力・学習状況調査の結果を基に、「自己肯定感」「将来展望力」を大切にキャリア教育の推進に取り組んでおられるとのことだった。現場から「漠然としていて、自由度が高い」「何をやったらよいか分からない」との声が多く挙がったこと、コロナ禍のため職場体験学習が制限されたこと等から、令和3年度より、地域や社会の課題を自分と関連付けて考え、その課題の解決に向けて探求活動を展開する「わくわく・どきどきSDGsジュニアプロジェクト」が始まった。小学校では中学校校区単位で取り組み、互いの取組をオンラインで交流する、中学校では、企業とのアイデアミーティングを行い、最後には各校の代表チームが集まりアイデアを発表し合うジュニアフォーラムを行うということだった。この取組について知り、小学校のうちに同じテーマで中学校校区単位で交流することで、中学校進学への不安を軽減することができると感じた。小中の連携の大切さを再認識した。

⑤ 大阪科学技術館、あべのハルカス

大阪科学技術館は企業や研究機関20社8団体27ブースで構成されており、水や天然ガス、LEDやSDGs等について体験しながら学ぶことができる施設である。特に「幸せな未来をひらく、SDGsと国際協力」のブースでは、SDGsの進み具合が磁石やライトを用いて色分けされており、子供たちにとって捉えづらいSDGsが視覚的に理解できるよう工夫されていた。各ブースの提示の仕方は、授業における教材提示を考える際の参考となった。

あべのハルカスでは、地上300mの日本一の高層ビルから「水の都」大阪を一望することができた。実際の景色を見ることで、高層ビルの建ち並ぶ北側と、住宅地や学校が多くある南側の違いが実感でき、地図だけでは気付きにくい大阪市内の土地利用の特徴に気付くことができた。この見学を通して、学校で社会科等の見学に出かける際には、どこに注目すればよいのか視点を示すことで、より多くの発見をすることができると自分自身で体感できた。

(3) 研修を終えて

各研修先で「自己肯定感」という言葉が出てきた。この「自己肯定感」を高めることが、キャリア教育の第一歩であると感じた。特に小学校では、様々な体験活動を行うことがキャリア教育の素地となる。低学年の生活科の時間に地区探検等を通して地域を知り、中・高学年の総合的な学習の時間に地域で活躍しておられる人々と触れ合うことで、自分が大人になったときの姿を思い浮かべることができると思われる。今後は、キャリア教育の視点を持ちながら、生活科や総合的な学習の時間等の教育活動に取り組んでいくことができるよう努力していきたい。

さらに、富山経済同友会のみなさんや異校種の先生方との交流させていただいたことも大きな学びであった。みなさんと交流させていただくことで、刺激を受けるとともに、学び続けることの大切さを再認識することができた。このような研修の機会をいただいたことに感謝し、この学びをこれからの実践に生かしていきたい。